

渡邊 尚教授退任記念号の発刊に寄せて

渡邊尚教授は、2008年3月に本学を定年退職されました。渡邊先生は2001年4月、本学経済学部国際経済学科新設に先立って着任され、大学院経済学研究科でも教鞭をとられました。ご在職中の教育・研究その他を通じたご貢献に対し、心から感謝申し上げます。

渡邊先生のご専門はドイツ経済史で、現代ドイツ論やヨーロッパ研究にも造詣が深く、本学でもEU経済論、欧米経済史をはじめとして幅広い科目を担当されました。また、2004年4月から2年間、大学院経済学研究科委員長を務められ、その後もシニア大学院制度の創設など、本学の大学院改革に多大な貢献をされました。

渡邊先生は1937年に東京でお生まれになり、東京大学経済学部及び同大学院経済学研究科を修了されたあと、北海道大学経済学部助教授を経て、1975年から京都大学経済学部助教授となり、1986年から本学に着任される2001年まで京都大学経済学部教授を務められました。

先生のご研究の成果としては、ドイツ経済史に関する『ラインの産業革命－原経済圏の形成過程』（東洋経済新報社、1987年）が主著であり、同書によって京都大学で経済学博士号を取得されています。このほか、『孤立と統合－日独戦後史の分岐点』（京都大学学術出版会、2006年）、『ヨーロッパの発見－地域史の中の国境と市場』（有斐閣、2000年）など多数の編著書があり、専攻分野における掘り下げた論考だけでなく、シンポジウムのコーディネーターや啓蒙的な著作の編者としても、たぐいまれな多彩な活動をされてきたことがわかります。本学でも、経済学部国際経済学科発足を機に編まれた『私たちの国際経済－見つめよう、考えよう、世界のこと』（有斐閣、2003年）の編集委員を務められ、執筆者会議や校正で文章表現に至るまでの確で厳しいご指導をいただき、大変わかりやすい内容の教科書を作ることができました。

ご在職中の渡邊先生は、研究・教育はもちろんのこと、その優れたバランス感覚によって学内行政にも活躍され、幅広い分野で本学に貢献していただきました。教授会をはじめとする学内の会議の場で、よく通る声と明快な論理でたびたび説得力のあるご発言をされていた姿が、今でも目に浮かびます。また、研究活動の組織者としても、2006年に本学で開かれた国際シンポジウム「領域統合・文化過程における国家と地域－日独比較－」の開催や、2005年から設置された東京経済大学現代ドイツ問題研究所の創設などにお力添えをいただきました。さらに私が驚いたのは、先生がご着任間もないころから、本学の職員の名前を实によく知っておられたことです。おそらく、先生の飾らない気さくなお人柄で、同僚教員のみならず、職員のみなさんとも様々な交流があったことと推察されます。

渡邊 尚教授退任記念号の発刊に寄せて

ご退職後の今日でも、国分寺市国際交流協会会長をはじめとする要職につかれ、ご研究や後進の指導も続けられています。今後とも、渡邊先生のますますのご活躍を切にお祈り申し上げます。

2009年1月

経済学部長 橋谷 弘